

「感染しない」「感染させない」を合言葉に

有田史談会 月例通信

コロナに負けない！

事務局 中村貞光
090-4740-4752

●有田史談会 HP へ GO！

坂井会長からのメッセージ♪

■ 史談会の皆様お元気にお過ごしでしょうか？
私は5月上旬に突然高熱と頭痛におそわれ体調をくずしておりましたが、ようやく体調も戻り有老連の演芸大会に向けて丸尾長寿会のメンバー24名と共に練習に励んでおります。

さて、現在西日本新聞に連載中の「歴史のかけらを探して」野上建紀教授執筆中の5月23日に掲載された「貿易の道」で、三上次男博士の著書「陶磁の道」が紹介されていますが、三上先生は天狗谷窯跡や谷窯跡の発掘責任者をされたおり深川製磁に良くお見えになりました。その折に頂いていた本のことを思い出し、本棚の奥に大切に保管していた本を取り出して改めて読み返しています。

坂井勝也

事務局より会報7月号への投稿のお願い！

■ さて、7月は本年度も「会報」を発行の予定です。活動が出来ないまま3ヶ月が経ちましたが、日頃の研鑽？の成果を発表して頂く良い機会です。

投稿の内容は問いません。自由なテーマで気軽に投稿をして頂くようお願いいたします。

今回の投稿者の一番乗りは前田順三さんで、表題は「月天子と月待講」です。A4で2ページの原稿を頂きました。皆様の投稿をお待ちしています。



※原稿の締め切りは7月15日です！

投稿は任意ですが無理のない範囲でご協力をお願いします。なお、原稿は紙面のレイアウトの都合で一部校正を行う場合がありますがご了承下さい。

■ 5月20日、政府の新型コロナウイルス感染症対策分科会からマスクの着用に関する指針「マスク着用の見解ポイント」が示され、わが史談会の活動を2年半ぶりに再開できそうです。史談会としては9月以降から状況を見ながら屋外での活動を再開したいと思います。皆様との久しぶりの再会が楽しみです。

有田八十八所札所めぐり 活動再開の予告です！



■ 新有田札所巡りは前回（2021年1月14日）実施から実に一年半も前のこととなります。前は29番札所まで見学しましたが記憶に残っていますか？

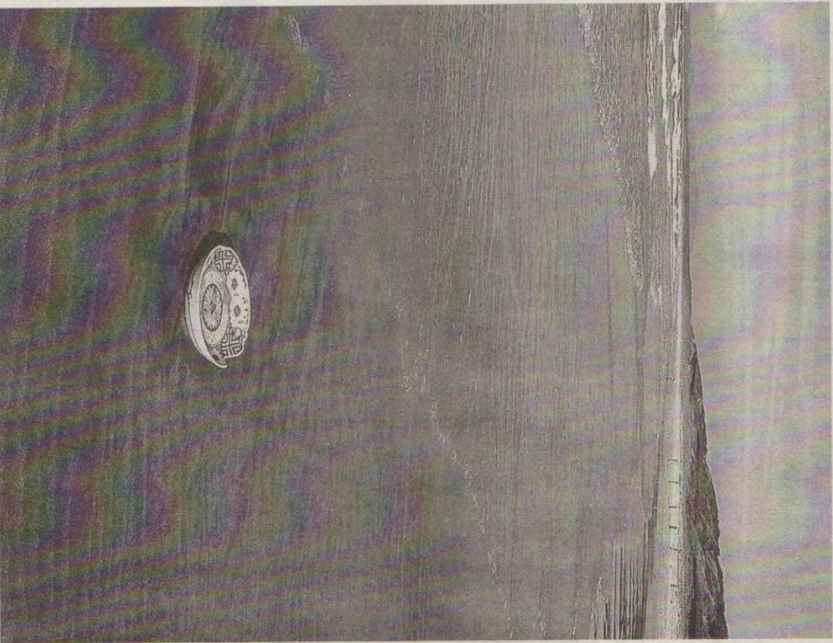
今回は30番札所（丸尾）からスタートの予定です。黒牟田・応法地区を巡り、その次は三代橋～南川原～南山～原明の順に巡ります。その後いよいよ本格的に？西有田地区が始まりますが足腰を鍛える絶好のコースです。見学に備えて準備運動を開始しましょう！



■ 西日本新聞に連載中の「歴史のかけらを探して陶磁考古学入門」野上建紀長崎大多文化社会学部教授は6月23日現在、⑭までを史談会ホームページにて公開中です。⑮は7月6日に掲載予定です。今後も順次掲載しますのでお楽しみに！

灘に面した美しい砂浜が続く岡垣(福岡県岡垣町)には陶磁器が漂着する。船が難破し沈んだ陶磁器割れて破片となって打ち寄せられ、波に洗われている。それらの多くは江戸時代に九州の北西部の肥前地域(現在の佐賀、長崎県の大半部)で焼かれた肥前磁器である。17世紀初めに日本で初めて焼かれた磁器であり、積み出した港の名前にちなんで「伊万里」とよばれた。陶磁器のように重てかさばるものを壊さずに遠く運ぶには船が用いられた。そのため、全国に運ばれた肥前磁器は北は北海道の上ノ国釧路遺跡、南は鹿角島の吹上浜に至るまで全国の海底や海岸で見えられている。そして、海は世界につながっており、肥前磁器は海外の海でも見つかっている。それらは海の「陶磁の道」の痕跡であり、研究の道標である。筆者の研究の端に言い表せば、これらの陶磁片から陶磁器の足取りを探り、陶磁器を通して歴史を見るというものである。特に江戸時代の肥前磁器を研究対象としている。

① 海と時を超えて



岡垣浜に漂着する陶磁器

(撮影・添田(征上))

世界へ広がる「伊万里」人の営みの小さな証拠

磁器は高温で焼き鮮半島に伝わり、豊臣秀知られるが、かつて肥前吉の文禄・慶長の役の際に連れ帰られた朝鮮人陶透光性をもつ清潔で美しい焼き物である。磁器の需要は世界中にあったが、どこでも生産できるものではなかった。特に原料に地域の偏りがあった。長らく限られた地域時代を経た後、中国磁器に運ばれる一方、東へは太平洋を横断し、文字通り地球を覆う市場をもつ。古くは中国の特産で、世界商品となり、続く肥前磁器もまた世界に渡る。国境を越えて求められる商品となることになり、今も肥前地域は固有の磁器をつくる技術が朝

のかがみ・たけのり 長崎大学文化社会学部 教授。1964年、北九州出身。専門は考古学。佐賀県有田町教育委員会の研究に代り、流通に関する、2014年に長崎現職。近著「陶磁のトリロジー」(勁草書房)。



野上建紀



れたこと、死者ともに埋められたことなど、さまざまなことを物語る。それらの多くは文字の記録として残されていないものばかりである。一つは人間の営みの小さな証拠ではあるが、さまざまな世界規模に広がる「グローバル」な研究となる。

有田焼や波佐見焼など肥前で生産された焼き物は、江戸時代に長崎の港から世界へ運ばれた。どんな経路で流通し、どのように使われたか。東南アジアや欧州、中南米にきた野上建紀さんがつづきます。

★西日本新聞に連載中の野上建紀長崎大学多文化社会学部教授「歴史のかけらを探して 陶磁考古学入門」の1回目です。2回目以降は有田史談会のホームページに掲載中です。